



せい
ノグ星のお話

ぎ のう はく らん かい 技能博覧会

「ああ、わたしにはノグ星の明るい未来が見える！」お城のバルコニーから国を見渡していたプロギッシュ王が、喜びの声をあげました。「私は、子供らが学習にはげみ、学んでいるのを見るのが楽しみなのじゃ。一人一人の生徒が知識と技能を身につけて、立派な国民に育ちつつあるのだと思うとな。いつの日か、成長した子供らが、このノグ星を新しい成功の極みへと導いてくれることが、私の願いじゃ。」

プロギッシュ王とトシュギは、子供達の小さなグループが、大きな木のかげで柵に向かって午前中の授業を受けている様子を見まわっていました。そう、ノグ星では、気候が快適で、雨も夜の間にしか降らないので、学校はいつも戸外での青空教室が開かれています。ノグ星人は、新鮮な空気が子供達の学習能力を高めると信じています。

「ノグ星の将来は、あなたたちにかかっているのよ。」と、アプセル先生が言いました。

「みんな、いつかは、この美しい国の一人前の国民、そして指導者になるんですもの。」

将来大人になってから役立つように、ふつうの科目以外にも何か新しい技能を学ぼう、

あなたたちの一人一人をはげますようにと、私達教師はプロギッシュ王から言いつがっているの。

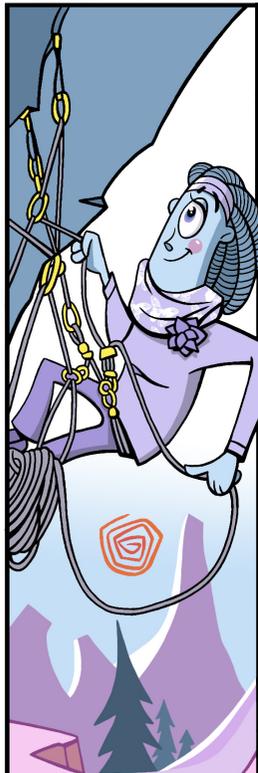
王様は、それをうまく言い表しておられるわ。『今日学ぶ技能の

一つ一つが、将来充実さの家を築く土台になる』ってね。」

「アプセル先生、それはどういう意味ですか？」8歳のティンシーがたずねました。

「プロギッシュ王はね、あなたたちが新しい技能を身につけるたびに、生きがいのある充実した人生を過ごすのに役立つ才能が身につくのだとおっしゃりたいのよ。」





「これは、私自身が今までに身につけた技能のリストよ。」 そう言うと、アプセル先生はホワイトボードに、10枚の紫色の石板を積み上げた絵をかき、その内の4枚に、技能の名前を書きこみました。『子供達に教えること』、『お菓子を焼くことと配膳サービス』、『服の仕立て』、『長距離走』。「それから、これから身につけたい技能も、たくさんあるの。」アプセル先生は、何も書かれていない石板を指さしながら言いました。

「今年は、登山もやってみたいわ。ノグ星で一番高い紫山を登る訓練も、もう始めたのよ。こうして身につけた技能の一つ一つは、私の充実さの家の一部なの。」

「いったん新しい技能を身につけちゃえば、一生それを楽しめるんだよ。」 ティンシーの後ろにすわっていた男の子マーチーが言いました。

「それに、将来新しい技能を学びながら、すでに身につけた技能にもっとみがきをかけることもできるしね。」 そう言ったのは、のっほの男の子マンチです。

「8か月後には、プロギッシュ王が技能博覧会を開くそうよ。ノグ中の子供達が参加して、新しく身につけた技能をひろうするの。」

「ずいぶん先のお話ね。」 小さな7歳の女の子ナンセルが言いました。

「新しい技能を身につけるには、時間がかかるわ。8か月なんて、あっという間に過ぎてしまうわよ。」



その週末、ティンシーとナンセルとマーチーとマンチは、技能博覧会に備えるため、これからの8か月間、何を集中的に学ぶことにするが、両親と話し合いました。

「おまえのおじ上、『名人バーシャグ』は、立派な家具職人なのよ。」 自分は棚やタンスの作り方を学びたいと、マーチーが両親に話すと、お母さんが答えました。

「おじ上はベンキ屋さんだとばかり思っていたよ。」とマーチー。

「それは、おじ上の持っている数多くの技能の一つに過ぎないの。きつと、喜んでおまえを仕込んで下さるわ。」

「バーシャグに、何の作り方を教わりたいんだい？」とお父さんがたずねました。

「母上がつくっているすてきな陶器をきれいにがされるように、棚を作つて差し上げたいんだ。」と、マーチーが答えました。



「お母さん、私はししゅうを学びたいわ。」とナンセルが言いました。「そうすれば、きれいなししゅうをして他の人にプレゼントできるもの。」

「かぎ針編みやマクラメなんがの手芸は母さんも好きだけど、ししゅうはしたことがないわ。」とナンセルのお母さんが言いました。「きっと、ナンセルがししゅうした作品を家の中にかざれば、すてきね。」

「だれに教えてもらえるのがしら。待ち切れないわ！」ナンセルが興奮しながら言いました。



「おまえは、どんな技能を学びたいんだい、マンチ？」お父さんがたずねました。

「分からない。」とマンチ。「ほく、何が上手にできるとは思わないんだ。」

「おまえは、賢くてゆうな子だ。」そう言って、お父さんはマンチの肩に腕を回しました。「きっと、何ができるさ。ちょっと、町を散歩しようか。そして、どんなサービスが提供されているか見てみよう。何かおまえの興味を引くような技能があるかも知らないぞ。」

ある通りを歩いていた時、二人は機械工のオズキャットさんのところに立ち寄って、彼がクータン車の修理をしているのを見ながら話をしました。後でマンチがお父さんにたずねました。「クータン車の御者になることって、学べると思う？」

「おまえの年でクータン車の御者とは聞いたことがないが、できないことはないだろう。だが、最高の乗り心地のクータン車の御者は、客車を引くクータン達と良いコミュニケーションができる者だということは知っているかい？」

マンチはがっかりした様子です。「ほく、クータンとコミュニケーションするなんて、学んだことないや。それなら、御者になるのは無理だね。」

マンチのお父さんはほほえんで言いました。「きっと、クータン車の御者になることと、クータン達と良いコミュニケーションをする方法を両方教えてくれる人が見つかるさ。」



「お父さん、私、何を学んだらいいがしら？」ティンシーはお父さんに相談を持ちかけました。

「ティンシー、父さんはいつも、おまえにはスカリーボール¹の選手になる素質があると思っていたんだが。チームに入ってみる気はあるかな。」とお父さんが言いました。

「毎年博覧会では、スカリーボールのトーナメントがあるわよね。」とティンシー。

「そうだよ、ティンシー。一生懸命練習に励めば、博覧会のトーナメントで見事なプレーを発揮する準備ができるぞ。」とお父さん。



4人の生徒は必要な知識を身につけるために、一生懸命勉強しました。そして放課後や週末には、新しい技能を身につけるため、勤勉に時間を注ぎこみました。そして数ヶ月が過ぎ、季節も変わりました。



「御者のキャンチさんが、ここ2週間ほどおまえの姿を見ていないが、どうしたのかと言っていたよ。」と、マンチのお父さんがたずねました。

「退屈なんだ、お父さん。」とマンチが答えました。

「おまえは御者になりたかったんじゃないのかい？」

「だけどキャンチさんは、ほくがたづなをにぎる時は、いっしょに補助たづなをにぎっているんだ。」とマンチが言いました。「キャンチさんは、ほくがクータン達をうまくあやつっているって言うけど、一人ではやらせてくれないんだ。」

「マンチ、それにはもっともな理由があるはずだよ。そのことについて、キャンチさんとは話したのかい？」

「方が一の時には助けられるようにだって。だけど、クータンやクータン車のあつがい方で知る必要があることは、もう教わったんだ。だって、もう5か月も訓練を受けているんだもの。ほくを信用してくれないだけだよ。」

「もし父さんがキャンチさんだったら、訓練にちゃんと来続けない御者を信用するのに苦労するだろうな。」と、お父さんが言いました。

少し考えると、マンチは言いました。「そうかあ。分かったよ、お父さん。ほく、ちゃんと通うよ。」



¹スカリーボール：ノク星のスポーツで、サッカーに似たスポーツ。）



「お母さん、見て！」ナンセルが得意気に言いました。「まくらカバーができたの。」ナンセルは、紫の花が満開の様子をししゅうしたまくらカバーを見て、わくわくしていました。

「あなたの紫色のベッドカバーと合っていて、きれいだね。」とお母さんが言いました。「ところで、博覧会のためには何をししゅうするが、もう決めた？」

「これ以外に何がやるうとは思っていないの。このまくらカバーを出せばいいんですもの。十分いい出来でしょ。」

「ああ、とてもきれいだね。」ちょうどナンセルの部屋に入って来たお父さんが言いました。「だけど、もうちょっとむずかしいデザインに挑戦して、新しい才能をのばすのも、楽しいんじゃないかな。」

「まだ3か月もあるんですものね。」とお母さんも言いました。「さらに練習すれば、きっと、もっとやりがいのある素晴らしい作品を出品できると思うわよ。」



「素晴らしい試合だったよ。」と、ティンシーのお父さんが言いました。「ボールを上手に操れたね。コーチのスフィアさんも、おまえのことを素質のある良いプレーヤーだとおっしゃっていた。チームに加わったことを喜んで下さっているよ。」

「お父さん、アプセル先生に話してもらえないかしら？」とティンシー。「歴史と算数の宿題がちゃんとできてないって言われたの。でも、宿題をやってる時間がないのよ！スクリーボールをもっと完璧にプレーできるように練習するひつようがあるんですもの。」

「ティンシー、スクリーボールをもっと上手にプレーできるようにすることは大切だが、歴史の知識と算数の計算も、きちんと分かるようにやっておくことが大切だぞ。優先するものをバランスよくやればいいんだ。」と、お父さんが答えました。



「マーチーが作った棚のおかげで、母さんの陶器が見映え良くなったわ。ありがとう。」と、お母さんが言いました。

「ほくの作った棚は、博覧会で最高の展示品になると思うよ!」と、マーチーが得意気に言いました。

「確かに、すてきな棚だね、マーチー。」とお父さん。「でも、それが博覧会で最高の展示品になってもなくても、私は構わないよ。おまえが一生懸命がんばって、役に立つ新しい技能を身につけたということが、父さんにはうれしいんだ。」



「1年の内で、私の大好きな日がやってきたぞ。」フロギッシュ王がトシュギに言いました。

「急ぐのじゃ。全ての展示品を見て、われわれの才能あふれる生徒達全員をはげましたいからの。」



「何と素晴らしい棚じゃ! この作品の制作者はどちらかの?」フロギッシュ王がたずねました。

「息子のマーチーでございます。」とお母さんが答えました。

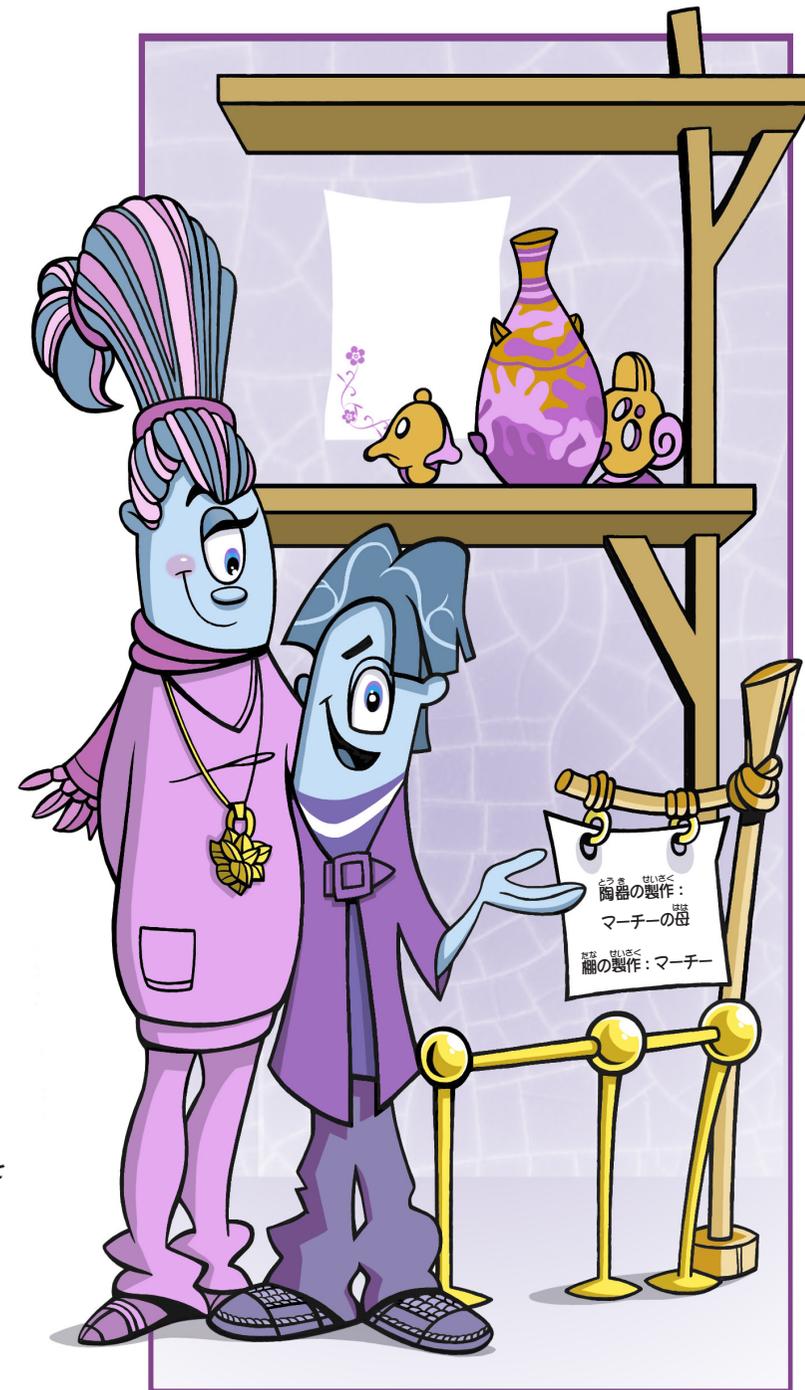
「おほめいただき、光栄でございます。」マーチーが王様におじぎして言いました。

「それにしても、浮かない顔じゃの。どうしたかな?」フロギッシュ王がたずねました。

「ほくの棚が二級品に評価されたからでございます。」

すると、フロギッシュ王が言いました。「うむ、しがしな、謙虚な2番目の場所も、悪くはないが。そちは、木を使って物を作ることを証明したのじゃ。だから、その技能をさらにみがき、来年の技能博覧会に再び出品してみるが良い。そちの作品を見れば、前途有望なことは分かっている。いつの日か、一級品の棚を作れるだけではなく、一級品のタンスも作れるようになるぞ。」

「そうお思いになりますか? 王様、ありがとうございます!」と、マーチーが言いました。



「何と美しい日没のししゅうじゃ！」とプロギッシュ王が言いました。
「そちの名前は？」

「ナンセルと申します、王様。」ナンセルはひさを曲げて、ていねいにおじぎをしました。

「ナンセルや、そちのすばらしい作品を、私の寢室の壁にかけさせては
いただけぬかの？ 夜休む時に、この日没をながめながら、創造主が
われわれに下さったすばらしい祝福を感謝したいのじゃが。」

「もちろんでございます！」ナンセルは歡喜の声をあげて答えました。

(最初の作品だけで止めずに一生懸命やって、本当に良かったわ。)と
ナンセルは思いました。



「王様。」トシュギが声をかけました。「そろそろ、スカリーボール・
トーナメントの決勝戦が始まるお時間です。会場へお連れするため、
王宮クータン車を用意いたしました。」

「トシュギよ、今回王宮車は不要じゃ！」プロギッシュ王が声高に答え
ました。「今年は、クータン車の御者になることを学んだ8歳の生徒が
いると聞いておる。その少年に送ってもらいたいのじゃが。このように若い
年齢でクータンを操ることを学んだ生徒は、いまだかつておらんからの。
感心じゃ。」

「承りました、プロギッシュ王。」そう言って王様におじぎをすると、
マンチはクータン車のとびらを開けました。

「お若い。私は、そちと共に御者席にすわりたいのじゃが。」と
プロギッシュ王。

「もちろんですとも、王様。私は席を外しますから、どうぞこちらへ。」
と、キャンチさんが言いました。

マンチがリードのクータンに合図すると、クータン車はゆっくりと
動き始めました。非常に優秀な訓練を与えてくれたことで、マンチの顔は
御者のキャンチさんへの感謝のほほえみでいっぱいでした。



「ノグ星のみなさん。」プロギッシュ王が、試合を見に集まってきた
ノグ星人の観客にあいさつして言いました。「試合を始める前に、この
博覧会においてすばらしい業績を残した生徒のみなさんをたたえたいと
お思います。」

すると、3,000人近くの生徒が立つアリーナの中心に向かって、口笛と
拍手と共に、あちこちから「フー！」、「すばらしい出来だ！」、
「ブラボー！」という歡声が上がりました。

「それでは、スカリーボール・トーナメントの決勝戦を楽しむといたそう！」



「今日の試合でボールを非常にたくみに操った、うら若き女子選手を紹介していただけませんか。」フロギッシュ王が優勝チームのコーチにたずねました。

「フロギッシュ王様、こちらはティンシーにございます。」と、コーチのスフィア先生が紹介しました。

「もしそちの学業もスカリーボールのように優秀なら、そちには明るい未来があるぞよ。」とフロギッシュ王がいました。

ティンシーは顔を輝かせました。「算数と歴史はクラスで一番でございました。」（アプセル先生、お母さん、お父さん、私がちゃんと宿題を終えられるように面倒を見てくれて、ありがとう。）



「トシュギ、共に感謝の祈りをささげようではないか。」その夜お城にもどったフロギッシュ王は、感激の涙を浮かべながら国中を見渡して言いました。「ノグ星の将来がすばらしく期待に満ちたものであることを、心から感謝するばかりじゃ。」

